

◆鬼蛭◆

「あは♥ お姉さんのおっぱい美味しいですか？ おちんちんもお姉さんの中でカチカチにしちゃうなんていけない子ですね♥」

「ん〜♥」

ひとりの男の子が森の中で『鬼蛭』というモンスターに襲われていました。蛭は二度吸い付いたら満足するまで離れません。鬼蛭も例に漏れず満足するまで男の子を離さないでしょう…。死ぬまで



「そんないけない子は搾り尽しちゃいます♡ ほらほら、坊やのおちんぽミルク、お姉さんの中に出しちゃえ出しちゃえ♡」

「んー♡」

それは性交経験がまったくない男の子には刺激が強すぎました。鬼蛭に押し掛から、拘束された男の子に抗う術は無く、そのままおちんちんを膣内で翻られて、そして…



「んう♡」

「やあん♡ 坊やおちんぼミルクう、中にキタあ♡」

そのまま鬼蛭の膣内に吐精してしまいました



「ほらほら♥出して出して♥お姉さんのおっぱいミルク吸いながら、坊やおちゃんほミルク、お姉さんの子宮に出しちゃえ♥」

「ん！んう！んんんんんんんんー!!♥!!」

おっぱいを吸った瞬間、男の子は最初の射精よりも数十倍の快感が電流の様に体に走り、そのまま噴水の如く鬼蛭の膣内に射精してしまいました。鬼蛭の子宮も降りて来て男の子のおちんちんを咥え込んで吸い付いてくるのでたまりません



「気持ち良すぎてびっくりしちゃった？でもまだおちんちん
びくびくしてて、おっぱいちゅうちゅう吸って…可愛い♡」

「ん…ん…ん…ん…」

あまりの快感で男の子の意識は甘い霞が掛かったように朦朧としますが、
それでも喉の渇きと鬼蛭の甘い母乳に抗えず、そのまま無意識に
おっぱいをちゅうちゅう吸ってしまいます



「あは♥ もつともつと気持ち良くしてあげるからねえ♥
とろとろに溶ろかしてあげるう♥」

「んん〜♥」

何かがお尻にへばりついて、それがどんどん広がっているのが
感じられますが、そんな事よりも男の子は鬼蛭のおっぱいの甘さと、
腔内でぐちゅぐちゅにおちんちんを扱かれる気持ち良さに夢中です



「んう！」

「頭まですっぱり食べちゃった♡ さあ、このまま溶けちゃいましょうね♡
おちんちん繋がったまま、お姉さんとひとつになりましょうね♡」

そして気が付けば男の子は真つ暗闇の中に閉じ込められました。
身体全体が熱く、だけど心地よく、男の子は不安や快楽の中に
翻弄されながらも、それでもおっぱいミルクを吸うのを止められません。
そして…



「んぎゅうんんんんんんんー!!!」

「あは♥キタあ♥とろとろ坊やおちんちんから噴き出して
お姉さんの子宮にびゅくびゅく入ってくるのお〜♥」

気が付けば男の子は自分が溶けて、おまんこに食べられているのに
気づきましたが、しかしそんな恐怖を一瞬でも抱く事はありません。
何故ならいままでの快楽よりも凄まじい刺激で恐怖も何もかも
抱く間もなく吸い尽くされてしまったからです。
そして男の子はそのまま鬼蛭に吸収され死んでしまいました。END



「あは♥ 私のおまんこ美味しい? モンスターに屈服しちゃうなんて
悪い人間さんですね♥ そんな悪い人間さんは搾っちゃいます♥」



ある村人が滅多に人が来ない林の中で、人外の者との淫靡な行いに耽っていました。もう何回もそのような背徳的な事をくり返しているのです。

「あらあら、もう出ちやつたのお？ 相変わらずの早漏さだね」
本当に君はどうしようもない人間さんですね」

毎日毎日、畑を耕して収穫物のほとんどが税として役人に持っていかれる、
なんの楽しみも無い人生に辟易していた男にとって、例えモンスターでも
イイ女とやれるのなら、それで良かったのです



「ほらほら、もつと出しちゃえ出しちゃえ」
私の蛭の中に漏らしちゃえ」
もつと君のおちんぽミルク、



それに、お尻に顔を埋め、おまんこに犬みたいに舌でぺろぺろ舐めて、
勃起したチンポをぬるぬるな蛭まんこでぐちゅぐちゅで扱かれるなんて、
こんな事、普通の女では味わえません

「ふふ♥ このまま搾り殺されてみる？ とつても気持ち良いよ♥
私がこのまま天国に連れて逝ってあげようか？」



蛭まんこにただ漏れな中、男はこのまま殺されても、
こんなに気持ち良いのなら、それも本望と、鬼蛭の尻にしがみ付いて、
まんこを舐めながらそう思いました。END

「君のこと飽きちゃった♪ だから選ばせてあげるね、このまま見逃されて、何の生き甲斐も無い農民に戻るか、私の蛭まんこにチンポ突っ込んで気持ち良〜く射精しながら死ぬか…どっちか選んで♡」

くぱあつと広げられた蛭まんこは、まるで腹を空かせた肉食獣が口から涎を垂らすが如く、愛液が垂れています。あの中にチンポを挿れた瞬間、鬼蛭の言う通り最上の悦楽のもとに果てるでしょう

くぱあ

あ♡♡

「ん…♥ きたあ♥」

あへんえ〜♥♥♥

男はチンポを蛭まんこに挿れてしまいました。もともとこのまま搾り殺されても本望と思っていたのです。蛭まんこの中はひだひだ肉壁が絡みつく上に、先つちよに吸い付いてくる極上まんこでした。このままでも思わず漏らしてしまいそうです。

ぬ

い

ふ

い

ふ

ぐ

ぐ

ぐ

「ほらぁ♡ 動かないの？ じゃあこっちから動いてあげるう♡ びゅっくんって射精して、死んじゃおうね♡」

めめ～♡ らめえ～♡

あまりの気持ち良さに身動き取れない男に対して、鬼蛭はそんなの関係ないとばかりに腰を揺すつてきました。ただでさえ挿れただけで漏れそうだったのに、男に抗う術など有りませんでした

くちゅ♡

くちゅ♡

くちゅ♡

くちゅ♡

おっおお〜

「はい♥ お漏らしよく出来ました〜♥」

蛭は吸い付いた獲物を吸血する生き物で、そのモンスターの女性器はまさに男を搾り殺す為だけの極上搾殺器官です。男はあまりの気持ち良さに情けない声をあげながら吐精し続ける事しか出来ません

とっ
びゅんっ

びゅる
びゅんっ

「えへへ♡ まだまだこんなものじゃないよ、飽きたけれど私って君の事、結構好きだから、
最っ高に気持ち良い最期を逝かせてあげるねえ♡」

あ…♡ あ…♡ あ…♡

くはぁ♡

びゅん♡
どぶ♡
どぴ♡
びゅん♡

鬼蛭が何かを言っていますが、壊れた蛇口のように精子を漏らしている男には何も聞こえません。
頭が真っ白になってそれどころではないのです。そうこうしている間に鬼蛭の尻尾？髪？
もうひとつの搾精器官が口を広げて、近づいて来ました

「あは♥ 君を全部食べちゃった♥ さあ、溶けて私のおまんこに入っちゃいましょうね♥」

鬼蛭は頭部から伸びている搾精器官で男を丸呑みにしてしまいました。中は暗く、狭く、柔らかく、きつく、息も礫に出来ないのに、気持ち良いのが止まりません。男は溶けながら、それでも鬼蛭のおまんこに射精し続けるのです



「あゝん♡ 溶ろけた君が私の子宮に入ってくるう♡ いい♡ いいよお♡
もっとう♡ もっときてえ♡」

とうとう溶けた体液が男のちんぽを通じて漏らしてしまいました♡
痛みは無く、むしろ全身がちんこになったかのように、全身が熱く、
擦られる度に絶頂してしまいます。鬼蛭はそんな溶けた男を子宮で
美味しそうに呑むのです



「んふふ♥ 実はね、ずっと前から君の事をおまんこで食べたかったんだ〜
とろとろに溶かしてね、おまんこで食べたかったの〜♥」

そんな事を嬉しそうに告白しながらも、鬼蛭は子宮口で男のちんぽに吸い付き、
体液を食欲に吞んでいきました。そして男はみるみる内に萎んで
逝ったのです。体液が子宮に入り切らず、溢れているのに、
それでも吞み続けるのです



「ん…♡ ほら、入っておいで♡ 君の事…全部おまんこで食べたいの♡
受け入れたいの♡ きてえ♡」

どんどん溶ろけた男が鬼蛭のおまんこに吞まれて逝き、
どんどん鬼蛭のお腹が膨らんでいきます。苦しい思いをしながらも、
それでも鬼蛭は愛おし気に溶けて死んでいる男に囁くのです。



「あ、あんっ♡ 残りを搾ったら…、勢い付け過ぎちゃった♡
繋がっている所から噴き出してちゃって…、もったいない♡」

とうとう男はそのほぼ全てを鬼蛭のまんこに吞まれてしまいました。
少し溢れて零してしまった男だった液体を惜しみながらも、
鬼蛭はとても幸せそうです。END



「ふふ♥ どうですか？ 私のおっぱい気持ち良いですか？
遠慮せずにいっぱい乳出して下さいね♥」

森の中で鬼蛭はひとりの男を捕まえました。捕食器官で上半身をずっぽり丸呑み拘束して下着を剥いでむき出しになったおちんちんをおっぱいで挟んであげました。鬼蛭は男のほとんどがおっぱいが好きなのを知っているのです





「はぁ〜い♡ びゅつびゅ出ましたね〜♡
私のおっぱい気持ち良かったんですね〜♡ 無駄撃ちご苦労様です〜♡」
鬼蛭は自慢のおっぱいで男を搾るのが大好きです。おっぱいでおちんちんを
挟んで扱くと、とても嬉しそうにおちんちんが震えて、とても気持ち良さそうに
白いおしっこを漏らして、それがとても面白いからです

「んふふ♡ さあ、このままおちんちん気持ちのまま、溶けちゃいましょうね♡ 私のおっぱいで気持ち良く死んでくださいね♡」
射精は女を孕ませる為の行いなのに、人間の男はおちんちんが気持ち良ければ貴重な子種を漏らしてしまう…そんな愚かしい人間の男をおっぱいで賜って搾るのがとても面白いのです



たば♡

たば♡

ぐ♡

たば♡♡

たば♡

たば♡

たば♡

たば♡

ぐちゃ♡

ぐち♡

ぐちゃ♡

ぐいぶん♡♡

とばん♡

「あは♥ 出たあ♥ おちんちんからびゅっくん出て来てうう、
気持ち良かったですか？ ほんと、馬鹿みたいですね〜♥」

そしてこの男も他の男と変わリません。捕食器官に全身を包まれて、
溶かされているのにおちんちんは硬いまま。おっぱいで扱くと
気持ち良さそうに子種を漏らし続け、遂に溶けた男の体液も
漏らしたのです。END





「ほら、すっかり舐めな。私のまんこ舐めて
チンポ膨らませるなんて、
本当にロリコンの変態野郎だな。いいぜ、
どーせおっさんは
私に搾り殺されるんだから、
好きに食いなよ」

そこらの物陰にちんぽ膨らませて
視姦していたロリコンの変態おっさんを
捕まえたロリな鬼蛭ちゃん。
どーせ搾り殺すからとなんかロリコンが
喜びそうなことをやってあげていました



「あ、出た♡ あーあ、おっさん本当に終わつたな。蛭はなー、噛みつかれたら血が止まらなくなるんだぞー？ おっさんもこのまま漏らすの止められずに、死ぬんだぞー」

実物を目の前に、しかも舐めている
性的興奮が限界突破して、
遂におっさんはちんぽに吸い付いている
鬼蛭ちゃんの捕食器官に
漏らしてしまいました。
鬼蛭ちゃんが言った通り、
まるで止まる気配也没有



「お♡それでも舐めるのかー？
あー、まあ、最後まで味わなけりや...
どーせなら最後まで味わなけりや...
もったいないか？まあ、良いよ。
好きにしな。ほんと、おっさんつて
どーしようもない変態ロリコン野郎
なんだなー！」

普通、射精したら、男は舐めるのを
疎かにするものですが、
このおっさんは真性のロリコン変態
野郎なのか、鬼蛭ちゃんのロリまんを
より激しく舐めて食ります。
その浅ましい姿はまさに豚そのもの
です



END

そんな姿が可笑しくて、鬼蛭ちゃんはおつさんとそのロリコン変態おつさんの事が可愛く思えてきました。おつさんはそのまま捕食器官の蛭に漏らしながら死ぬまで鬼蛭ちゃんのロリまんを堪能しましたとさ。

「ふふ♡ほんとーにどーしようもないなー!、しょうがないなー!。ほら、もつと奥まで舌つっこんで味わえよ。もうすぐおつさん死んじゃうぞー♡もつと激しく舌でかき回せよほらあ♡」